

# 社会人メンターを導入した中学校でのキャリア教育の試行的評価<sup>†</sup>

尾澤重知<sup>\*1</sup>・加藤尚吾<sup>\*2</sup>・西村昭治<sup>\*2</sup>

大分大学高等教育開発センター<sup>\*1</sup>・早稲田大学人間科学学術院<sup>\*2</sup>

あらまし：様々な職業に対する関心の育成を目的とした中学生対象のキャリア教育を、総合的な学習の時間の一環として、中学校と大学との共同で実施した。本授業実践では、社会の先輩としての社会人メンターと、中学生をインターネット上の電子掲示板で結び、質疑応答を基本としたコミュニケーション機会を提供した。本研究では、キャリア教育としての本授業実践の評価を検討すると同時に、生徒が社会人に対して行った質問内容を分析し、生徒の質問の特徴や仕事観を検討する。量的・質的検討の結果、社会人メンターとの質疑応答機会を提供したことには一定の評価が見られた。また、生徒の質問は、メンターの経験や仕事内容、感情面などに焦点が当てられているという結果が得られた。

キーワード：キャリア教育、社会人メンター、総合的な学習の時間、電子掲示板

## 1. はじめに

近年、若年層における仕事観の変化や、労働意欲の変化などを背景の一つとして、若年層に対する「キャリア教育」の重要性が指摘されている。

キャリア教育は、文部科学省の中央教育審議会の答申（文部科学省 1999）では、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリア（職業生活を核とした生き方）を形成していくために必要な意欲・態度や能力を発達的に育てる教育」と定義されており、近年は初等・中等教育などの教育現場でのキャリア教育の実践例も増加している（三村 2004）。

初等中等教育におけるキャリア教育の手法としては、教材学習や、社会人による講義の実施、職業体験学習、また、書籍やインターネット等を用いた調べ学習などが挙げられる。本研究では中学生を対象としたキャリア教育の手法として、インターネットを利用した社会人との交流の促進に着目し、実践研究を企画した。

本授業実践は、中学3年生に対して、様々な職業に対する関心の育成や、進路選択にあたって必要な情報提供

を目的として実施した。具体的には、何らかの職業に就いている社会人メンターと中学生を、インターネット上の電子掲示板で結び、生徒が社会人メンターに対して、自由に質問などのやりとりをできるようにした。

電子掲示板を用いて社会人（科学者、数学者など）と児童・生徒を結ぶ試みとしては、国内では美馬（1997）や、市川（1993）などが先行する実践・研究として挙げられる。本研究では、これらの研究を踏まえながら、キャリア教育としての応用・発展を図ったものである。

本研究の目的は第一に、生徒からの授業実践に対する評価を概観し、社会人との交流にもとづくキャリア教育の可能性を検討することである。第二に、生徒が社会人に対して行った質問内容から、生徒の仕事への関心や仕事観の特徴を検討する。仕事観は、職業選択に影響を与えるとされ（日本経済団体連合会 2003）、生徒の質問の特徴を探ることで、今後のキャリア教育に向けての基礎資料を提供できると考えられる。

## 2. 授業実践の概要

本実践研究は、埼玉県所沢市内のA中学校をフィールドとして行われた。本研究ではA中学校の3年生（6クラス、180名）を対象とし、2006年6月から10月までを研究対象期間とした。実践の実施にあたっては、同市内のB大学が実践面で協力し、必要な支援を行った。

授業は総合的な学習の時間の枠組みの中で行われ、一回の実施につき2時限連続での実施を原則とした。授業実践全体は、3つの内容から構成されている。具体的には（A）電子掲示板を用いた社会人との交流。（B）近隣地域での1日職業体験。（C）卒業作文の作成である。本研

2007年4月2日受理

<sup>†</sup> Shigeto OZAWA<sup>\*1</sup>, Shogo KATO<sup>\*2</sup> and Shoji NISHIMURA<sup>\*2</sup>: A Trial Evaluation of Carrier Education at a Junior High School

<sup>\*1</sup> Center for Research and Development of Higher Education, Oita University, 700, Dannoharu, Oita-shi, 870-1192 Japan

<sup>\*2</sup> School of Human Sciences, Waseda University, 2-579-15, Mikajima, Tokorozawa, 359-1192 Japan

究では、これらのうち授業実践の中核となる電子掲示板を用いた社会人との交流に焦点を当てた評価を行う。

## 2.1. 社会人メンターについて

本実践研究では、社会人を社会における先輩としての「メンター」と位置づけ、生徒から寄せられた質問に回答することを主な役割とした。以下、社会人メンターを「メンター」と呼ぶ。

メンターは、生徒の活動規模に合わせて30人（30職種）をボランティアで募った。全国の広範囲から推薦で募集したため、メンターと生徒は直接対面せず、原則、電子掲示板の上のみで交流を行うことを前提とした。

メンターは、様々な職業に対する生徒の関心を育成するために、多様な職種から選出された。具体的には、企業の経営や組織に関わる職業として会社経営者や、ITベンチャーなど。接客・サービス業として、販売員、フライトアテンダント、葬儀社など。高度専門職として、小児科医、助産師、塗料研究者など。生徒に人気のある職種として、アニメーションやスポーツ関連など、その他農家、教員、公務員などから構成されている。

メンターに対しては、開始時に、本授業の主旨や実践上の留意点を伝えた。また、キャリア教育について理解を深めてもらうために、SCHEIN (1985) の3つの問いを示し、「やりたいこと（動機・欲求）」「できること（能力・才能）」「働くことの意義（意味・価値）」などの視点を意識しながら生徒からの質問に回答するように求めた。

## 2.2. 授業実践の特徴

本実践校では、生徒が同時に利用できるPCの台数が約30台と限られ、総合的な学習の時間以外ではPCを利用できないという制約があった。このような環境下で、授業実践を円滑に運用し、全員が参加できるようにするために、次のような工夫を加えた。

第一は、電子掲示板の投稿内容の印刷である。回答を全体に共有するためにメンターからの回答は原則として印刷し、PCを使わなくても閲覧できるようにした。

第二は、生徒全員が任意のメンターに質問や感想を記せるようにするための質問票の利用である。生徒は、任意のメンターを指定し、質問票に手書きで記入した。

第三に、生徒全員の参加を促すための役割設定である。クラス全体を3つの役割へ分割し、「ファイルまとめ係」「質問まとめ係」「パソコン入力係」が設けられた。

「ファイルまとめ係」は生徒からの質問・感想や、メンターの回答を整理し、生徒が紙媒体で共有できるようにした。「質問まとめ係」は、ファイルを元に、生徒からの代表的・特徴的質問を選択する役割を担った。質問については、メンターに対する負荷を考慮し、授業毎で1メンターにつき4件以内の質問にまとめさせた。「パソコン入力係」は、まとめられた質問を電子掲示板に入力すると同時に、自分自身の感想などを入力した。

各グループの配属は、生徒の希望を元に固定したが、

授業時間中に相互に見学できる機会を設けた。これにより生徒が相互に交流できるようにした。

## 2.3. 授業実践の流れ

関連する授業は期間中に8回実施された。うち第2～7回の授業が、電子掲示板を用いた生徒＝社会人メンターの交流の試みである。

第2回授業では、生徒に電子掲示板の利用方法を示し、メンターに対する初回の質問を投稿させた。初回質問は、生徒全員が各職業の全体像を捉えやすくするため、また、メンターに対しても共通の枠組みを提供するため、「仕事の内容を教えてください」と「どんな資格や能力が必要ですか？」という共通質問を設定した。

第3～6回の授業では、生徒独自の質問が行われた。電子掲示板を利用する授業の最終回となる第7回授業はメンターに対するコメントや感想を主に行うように促した。本研究対象となる授業実践全体の流れを表1に示す。

なお、メンターは各授業の終了後、次回授業までに質問に対する回答や何らかの投稿を行うことになる。

## 2.4. 利用システム

ツリー型表示が可能な電子掲示板システムを提供した。30人（30職種）のメンターそれぞれに独立した会議室が設けられたが、生徒・メンターはいずれの会議室も自由に閲覧できる。投稿は、セキュリティを確保した上で、実名投稿を原則とした。生徒は自宅でPCを保有していない場合を考慮し、授業時間内に利用することとした。一方、社会人メンターは常時利用できる。システム利用にあたっては大学のサポートスタッフ（教員、学部学生）2～4名が、授業内外で支援にあたった。

## 3. 研究方法

本研究では、電子掲示板の投稿、実践終了時に実施した質問紙調査について量的・質的に検討を行う。生徒の質問内容は著者らが、佐藤（2002）のフィールドワークにおける質的研究法を参照しながら整理した。質問内容の分類は2名の研究者が行い、一致率は73.9%だった。

本報告にあたっては、事前承認の上、生徒やメンター個人が特定されないよう考慮している。

表1 授業の概要

回数	日付	授業内容の概要
1	6月6日	ガイダンス・趣旨説明
2	6月13日	掲示板操作説明と共通質問投稿
3	6月27日	生徒による独自質問（第1回目）
4	7月4日	生徒による独自質問（第2回目）
5	9月12日	生徒による独自質問（第3回目）
6	10月10日	生徒による独自質問（第4回目）
7	10月17日	感想・コメントの投稿

#### 4. 結果と考察

第一に、授業の全体的な評価を検討するために、生徒に対して実施した質問紙調査の結果を概観する。アンケートでは対象となる生徒180名のうち、168名からの回答を得た。有効回答168件（有効回答率93.3%）のうち、男子は76名（45.2%）、女子は92名（54.8%）だった。

調査は、電子掲示板で生徒とメンターとのコミュニケーション機会を提供したことや、授業全体について生徒の評価についての項目を主とし、「とてもそう思う」から、「全くそう思わない」までの4件法で意識を聞いた。

本授業実践の目的である「自分が知らない職業について、興味を持つことができた」では、全体の約87%の生徒が、「とてもそう思う」（45.5%）、もしくは「どちらかといえばそう思う」（41.2%）と、肯定的に評価した。

メンターに対する質問や回答について聞いた「メンターへの質問を考えるのは楽しかった」や「メンターからの回答を読むのは楽しかった」、「メンターと直接、会ってみたいと思ったことがある」という質問では、6割前後の生徒が肯定的に評価した。一方、「将来、自分が社会人になったら、メンターをやってみたいと思う」という設問の評価は他項目と比べて低い。肯定的評価は約5割にとどまり、今後課題を残す結果となった。

総じて本授業実践では、様々なメンターの協力を得たことなどから、生徒の職業についての関心・興味を伸ばすことができたのではないかと考えられる。

一方で、電子掲示板を用いてメンターとの質疑応答の機会を提供したことには、半数以上が肯定的に評価しているものの、生徒全体から高い評価が得られているとはいえない。「メンターと直接、会ってみたい」の結果でも、約4割の生徒は「会ってみたい」と思うほどメンターを身近に感じていない。また、「メンターをやってみたいと思う」のように、能動的な関与が求められる質問についても多くの生徒の意欲を高める結果には至らなかった。メンターを導入したキャリア教育として、一定の成果が見られているが、生徒とメンターの間をいかに密接に結んでいくかは、改善の余地があると言える。

第二に、生徒がメンターに行った質問内容を検討し、質問内容に見られる生徒の仕事観の特徴を検討する。本授業実践では、第2回授業の共通質問を除くと、全体で286件の独自質問が行われた。一メンターあたりでは、約9.5件（SD=1.85）の質問が行われたことになる。

最も質問が多かったメンターには合計13件の質問が投稿された。スポーツやテレビ関連など、生徒にとって身近で理解しやすい職業に質問が集まりやすい傾向がある。逆に、最も質問が少ないメンターは5件だった。生徒にとって内容を理解しにくいと考えられる職業については質問数が少なく、やや偏りが生じる結果

となった。

生徒の質問に対して、メンターからの回答は259件だった。これは質問全体のうち90.6%について回答が寄せられたことを意味する。残る質問についてはメンターの多忙さなどの理由で回答が得られなかった。

生徒独自の286件の質問について内容を検討すると、全体としては「経験」「仕事内容」「感情」「進路・資格」「その他」に関する質問に分類ができる（表2）。以下、各分類について特徴を検討する。

**経験：**仕事内容そのものではなく、メンター本人に向けられた質問で、感情面以外の質問を指す。例えば、「中学の時、なりたいたと思った職業は、今やっている職業と同じですか。教えてください。」（広告代理店に対する質問、以下質問を引用した後に、質問対象となったメンターの職業・職種名を記す）、「ぼくは意志が弱いのですが、スポーツを続けるために3つ必要なことはありますか？」（スポーツ選手）などがある。質問全体のうち、99件（34.6%）が、本分類に該当する質問だった。

**仕事内容：**仕事内容一般や、情報を求める質問である。具体的には、「記事は、どのような流れで作られているんですか？」（雑誌編集者）、「1日に何人くらいのお客さんが来るんですか？」（百貨店）、「1年間で一番忙しい時期はいつごろでしょうか。」（農家）などがある。

**感情：**仕事にあたっての感情面（楽しい、つらいなど）に焦点が当てられている質問である。例えば、「葬儀に係わる仕事をしていて悲しくなることはないのですか？」（葬儀社）、「小さい子のここが大変というところ・嫌だなと思うことは何ですか。」（小児科医）などがある。

**進路：**職業に就くための具体的な進路や、資質、資格、方法などについて聞いた質問である。例えば、「カウンセラーになるには心理学の有名な学校を出たほうが良いのですか？」（カウンセラー）、「保険外務員・証券外務員の資格をとる為には、具体的にどんなことを学ぶのですか？」（銀行員）などの質問が挙げられる。

表2 生徒の質問分類

分類	分類数・比率	特徴・キーワードなど
経験	99 (34.6%)	職業に就いた理由、なりたいたと思った時期、心がけていることなど。
仕事内容	86 (30.1%)	仕事内容一般、具体的な仕事内容、仕事の決まり、その他一般の情報など
感情	58 (20.3%)	大変だった、楽しい、つらい、悲しかったことや、気をつけることなど。
進路	36 (12.6%)	進路、資質、仕事に就く方法など
その他	7 (2.4%)	仕事以外に関する質問など

**その他**：その他としては、仕事などと直接は関係のない一般的な質問が7件見られた。このうち、本実践では少数事例だが、生徒が自らの経験を開示し、これに対してメンターからの意見を求めた質問が1件見られた。

本授業実践では、実践の前提として初回に、仕事内容と資格・能力についての共通質問を用意していた。それを考慮しても、生徒は、メンター個人の経験や、仕事内容全般に関して関心を持っていることが伺える。

では、生徒の質問内容は、実践の過程でどのように変化しているだろうか。これを検討するために、時系列で質問の分類を検討した（表3）。本分析では、「その他」の7件を除き、生徒による独自質問1～4回目（授業回次第3～6回）の質問279件を分析した。表の数値は質問数、%は授業回次別の比率を小数点第1位まで示した。

生徒の質問が最も多く寄せられたのは、独自質問の3回目（授業回次で第5回）だった。これは、中学校の夏休み後の授業実践だったことや、授業間隔が開いていたことなどが影響していると考えられる。

時系列で分類数を検討した結果、統計的には有意差は見られなかった。しかし、個々の要素について見ると、いくつかの特徴が見られる。「仕事内容」は、1回目の独自質問で質問の約半数を占めているのに対して、それ以降は30%以下で、「経験」よりも比率は低い。

「経験」は1回目の独自質問では約32%だったが、4回目の質問では41.5%まで増加した。また、「感情」についての質問は、当初は約11%だったが、その後は約19～26%となっている。全体としては、「経験」「感情」など、メンター本人に向けられたと考えられる質問の合計は、独自質問の2回目以降、6割以上を占めた。

本授業実践では、生徒全員が各メンターに対して自由に質問を行うことができる反面、いずれも表面的な質問にとどまってしまう可能性があった。しかし、メンターからの回答を受けて、仕事内容一般から、より個人的な質問へと内容が移行した可能性が指摘できる。

個々の質問内容を見ても、2回目以降の質問では、前回の回答内容を元に、質問をより深めている事例が見られる。前回の回答を受けて質問を行っているものは2回目以降、引用が明らかなものだけでも12件見られる。

生徒の仕事観や関心を探るにあたっては、これらの

「感情」や「経験」に関する質問が、重要な指標と考えられる。仕事の経験と感情の関わりは、社会的にも関心を集めている分野であり（HOCHSCHILD 1983）、生徒の仕事観を検討するにあたって重要と考えられる。メンターを導入したキャリア教育として、このような質問内容の変化や質問の深まり方に着目していくことは必要であろう。

## 5. 今後の課題

本研究では、本授業実践の全体的評価と、生徒が掲示板に投稿した内容のうち、質問内容について検討した。生徒とメンターのやりとり全般や、生徒が学期末に作成した卒業論文については、現在、分析を進めている。今後、メンターとの質疑応答を中心としたやりとりが、生徒の仕事観や進路選択にどのような影響を与えたかについては、別途、報告したい。

本授業実践は、2007年度も継続して実施されており、本研究で把握したメンター間での質問数の偏りや、生徒とメンターの交流の仕方について改善を図っている。今後、経年変化も含め研究を進めていきたい。

## 謝 辞

本授業実践に協力くださったメンターの皆さん、学生アシスタントの皆さん、中学校の先生方に感謝したい。本研究は科学研究費補助金・若手研究(B)課題番号：17700616、代表者：尾澤重知の補助を受けた。

## 参 考 文 献

- 中央教育審議会 答申（1999）初等中等教育と高等教育との接続の改善について。文部科学省
- HOCHSCHILD, A.R (1983). The managed heart: commercialization of human feeling. University of California, California (石川准・室伏亜希 翻訳(2000) 管理される心。世界思想社、東京)
- 市川伸一（1993）ネットワークのソフィストたち。日本評論社、東京
- 美馬のゆり（1997）不思議なネットワークの子どもたち。ジャストシステム、東京
- 三村隆男（2004）キャリア教育入門—その理論と実践のために。実業之日本社、東京
- 日本経済団体連合会（2003）若年者の職業観・就労意識の形成・向上のために。日本経済団体連合会
- 佐藤郁哉（2002）フィールドワークの技法：問いを育てる、仮説をきたえる。新曜社、東京
- SCHEIN (1990) Career Anchors: Discovering Your Real Values. Pfeiffer & Co, San Diego (金井寿宏 訳 (2003) キャリア・アンカー。白桃書房、東京)
- (Received April 2, 2007)

表3 時系列でみた生徒の質問分類

分類/ 回次	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目
経験	17(32.1%)	27(35.1%)	33(34.4%)	22(41.5%)
仕事内容	25(47.2%)	22(28.6%)	25(26.0%)	14(26.4%)
感情	6(11.3%)	17(22.1%)	25(26.0%)	10(18.9%)
進路	5 (9.4%)	11(14.3%)	13(13.5%)	7(13.2%)
小計	53件	77件	96件	53件